

平城京右京一条二坊四坪出土の井戸枳材

—第530次

本稿は、平城京右京一条二坊四坪で検出した井戸SE3240の井戸枳材について報告するものである。本遺構については、既に『紀要 2016』において、概要を報告し、また『紀要 2015』において、最外年輪が680年で照合でき、さらに最外層に1層分の早材をもつことを報告している。今回、井戸枳材について、詳細な実測調査および観察をおこなった。

部材の形状 SE3240は井籠横板組の井戸枳で最下段の1段分のみ残存していた。南面および北面の両端を凸型、東面および西面の両端を凹型とする（図347・350）。

下面および上面には、北面の上面が1カ所欠くのを除き、2カ所に柄穴を穿ち、上面の柄穴には雇柄が残存する。本部材は最下段のため、下面の柄穴は不要で、転用の痕跡もない。したがって、本部材は当初より最下段に用いることがきまっていたものではなく、2段目以上と同じ作業工程のなかで加工されたものと考えられる。

寸法計画と尺度 各部材の主要寸法は、全体の形状は

表52 SE3240井戸枳材主要寸法 単位：mm

	全長	内法	成	厚さ	両端部柄				柄穴心間距離	
					形状	中央部成		上面	下面	
北面	2,207	2,081	250	66	凸	東 108	西 92	—	827	
東面	2,203	2,079	251	60	凹	南 116	北 115	826	826	
南面	2,207	2,084	253	62	凸	西 98	東 107	836	837	
西面	2,209	2,080	252	62	凹	北 112	南 103	823	828	

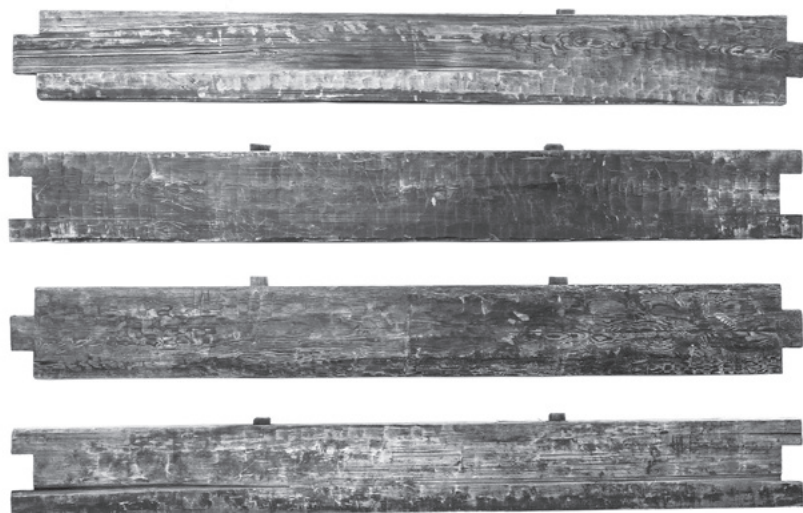


図347 SE3240井戸枳材外面全景（上から順に北面、東面、南面、西面）

ばらつきが少なく（表52）、平均すると全長2,207mm、内法寸法2,081mm、成252mm、厚さ63mmとなる。このうち内法寸法が7尺で計画されたものと考え、1尺の長さは297.3mmとなる。両端の柄は、全体の形状と比較するとばらつきが大きい。平均すると凹部を112mm、凸部を102mmと余裕を持たせており、加工精度に余裕を持たせている。上下段を連結する柄穴の心間距離は、南面のみ837mmであるが、そのほかは、826mmに集中する。加工のばらつきは、雇柄もしくは柄穴の調整で対応したと推測できる。

木取りと加工痕跡 各部材とも心去材で、西面のみ柱目材、その他の3面は板目材とする。板目材3点のうち、北面と南面は木表を外面向け、東面は木裏を外面向ける。

外面・上面・下面の各面はチョウナ痕跡が残り、特に外面は明瞭で（図348）、最大刃幅は72mmである。内面は比較的腐食が進んでおり、加工痕跡は明瞭でないが、部分的にかなり平滑であり、ヤリガンナによる可能性がある。両端部はノコギリで切断ののちに、ノミで整える。

北面東端の外面には、墨書で「○」を描く（図349）。組手をあらかず番付として描かれた可能性などが考えられるが、これと組み合う東面の北端をはじめ、他の部材では確認できず、意図は不明である。

まとめ 本部材からは、部位による加工の精粗、尺度などを読み取ることができた。伐採年代も推測でき、当時の指標としての資料性も高い。（鈴木智大）

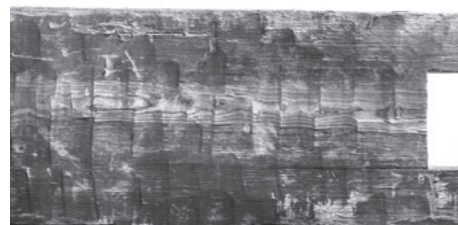


図348 SE3240井戸枳材東面外面加工痕跡



図349 SE3240北面東端外面墨書

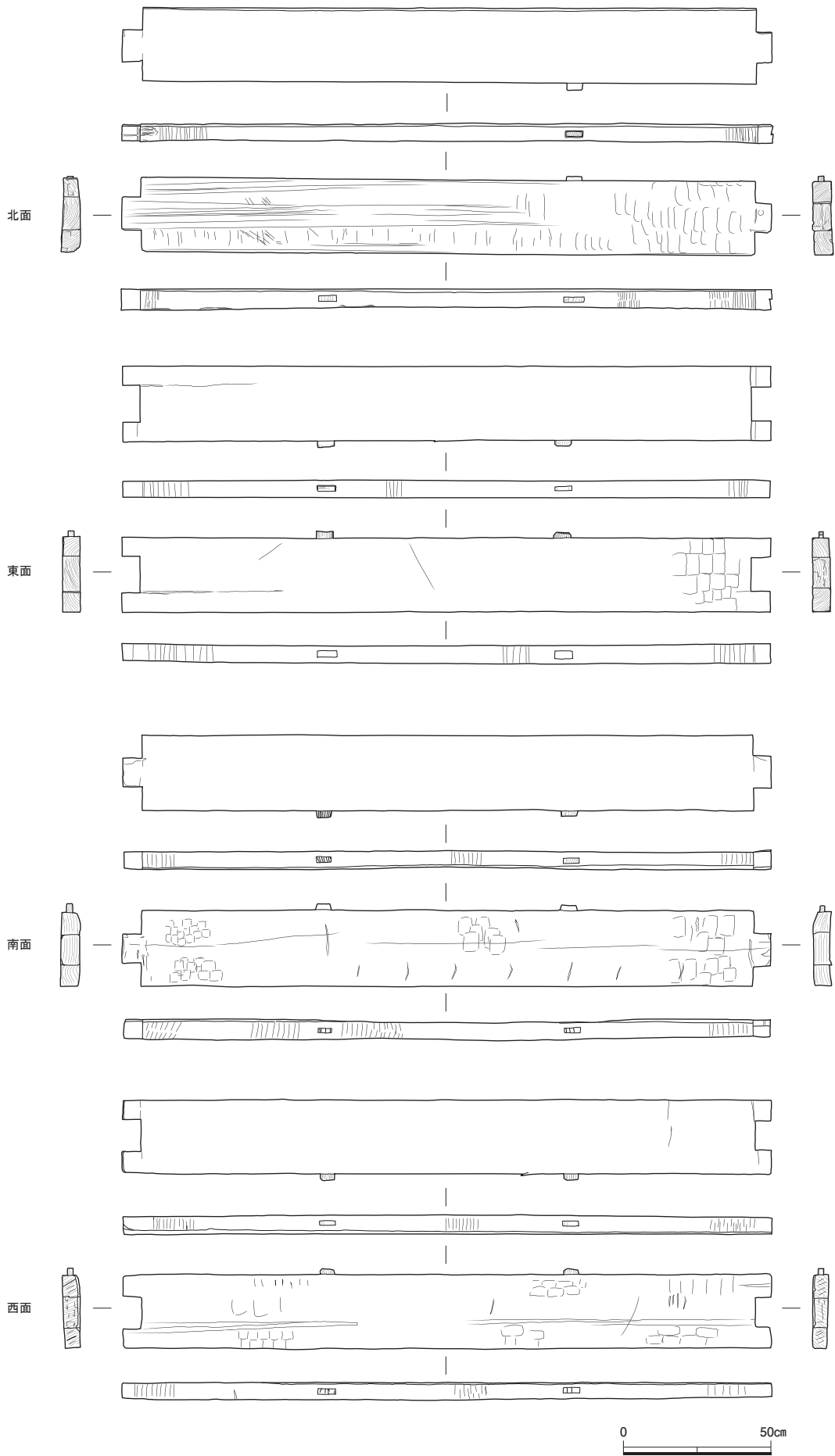


図350 SE3240井戸枘材 1 : 20